

きつときと新聞 ～H26年冬号特別号～

11月に富山国際会議場で開催された、第13回東海北陸作業療法学会の技術講座「連携を生み出す力」の講師をされた千里津雲台訪問看護ステーション作業療法士 石山満夫先生へのインタビュー内容を県士会の皆様にも紹介させて頂きたく、今回「きつときと特別号」を作成いたしました。面白くてわかりやすく、笑いにあふれた技術講座の雰囲気そのままのインタビュー？座談会？となりました。その雰囲気をお伝えいたしたく、先生のお言葉をそのまま掲載しております。また、内容が伝わりづらい点もあるかと思いますが、どうぞご了承ください。

Q. 先生はどのような想いで、現在の訪問看護ステーションを開設されましたか？

身近な町中で、ということ。そういう機会を作っていかなとあかん。作業が最初にきちゃうと「作業って自分と無関係」と思ってしまうから、P.R.をどうするか悩んでいるんです。気が付いたら喫茶店が作業所になっていたとか。いかにも作業所みたいのじゃなくて、気が付いたらリハビリになってたというか。あんな感じ。そんな人を僕のところでは障害者の雇用もしていたりしてんねんけど、まだまだですわ、あはは。もっと身近に町中でどう展開するかということを考えないとね。

Q. 訪問だからこそ感じられる難しさとは？

こちら側が行く仕事なんですわ。嫌われたら終わりですね。「あんた嫌やから来んといて」という人は少ないかもしれないけど、「何が悪いかわからんけどあの人家に入れたくないの」とか、相性ともいえるし、「うちの犬が吠えるの」とか。その環境が、来ていいよ、と言ってもらわんと何も始まらない(笑)。病院は外来とか来てくれるところが多いですよ、あるいは入院していて、もうおるとか。まあ、もちろんベッドサイドに行ったりとかはあるんですけど、やっぱり病院自体は自宅じゃない、生活するところではないので。ある訪問の依頼の時、「男が嫌」って言われることもある。対応できるのが男しかいない時なんかは、「女みたいな男ですがいかがですか」って勧めることもあります(笑)。

Q. 訪問されていて、最初のとっかかりで躓くことがあっても、何かのきっかけで変わることでありますか？

きっかけはすべてコミュニケーション。変わるきっかけは、まず試してもらい何しているか説明することに尽きると思います。誤解もされますが、誠意をもって話せば相手の理解が得られ、好転することもあります。最初嫌でも入れてくれれば変わる場合もある。逆に、最初よくても嫌になることもある。飽きられたり、ちょっと言うたことが気になって嫌われたり。じわじわと乗ってきて、その担当者が休みで、「代診で行きます」って言っても「あの人が嫌いと嫌！」と断られることもあります。あかんかなって思っても、ちゃんとやってる場合もあるし。途中で変わるときコミュニケーション力が問われます。

Q. 訪問に出た時の作業療法士の強みとはどんなことだとお考えですか？

作業療法士というても、私精神科出身だもんで、分野に関わらずなんだけど。皆さんも精神科の勉強をしておられるから、身に付けておられると思いますけど。私が関わった症例を含めてね、理学療法士さんも訪問するんだけど、OTさんなら、黙々とリハビリをしてるといことにならないように信頼関係づくりに頑張ると思う。しゃべる。それが大事。家族さんの介護負担とか、地域の中での家族の位置など。一家が地域から孤立無援とか、訪問では生活環境が知れることが強みです。物的環境であれば、どんなお風呂で手すりかどうでこう使う、便利、不便、無理とか、その環境で暮らす気持ちを汲むことができるのが大きな強みです。認知症にしても、介護している人とうようしゃべって、家を健康にするというか、訪問宅の環境を明るくしていくことが一番大事というか、OTらしいこ

とだと思います。

Q. ケアマネに向けてOTはこういうことが出来ると発信をしたいが、どうすればよいか？

個別からやな。全体にやっても見向きもしない。個々で深めていって、知っている事例について検討する。事例報告会してみとか。OTはOTだけでまとまるのではなく、もったいない。地域では皆で事例を挙げて、「こういうのを〇〇市モデルにしよう」と行政に訴える。地域ケア会議なんかで認めさせる。介護保険事業は市町村が保険者やから巻き込む。

また、介護事業者同士が知っておけるように事業所の連絡会年に1～2回の研修会や介護フェアなどのイベントにOTも参加し、発信していく。いずれにしても「あんたのケースまだまだこうしたらできると」実際に見せつけることです

Q. 通所の中で「集団の活用」について。また、失敗を防ぐコツを教えてください。

集団やからこそ効果が見られる、精神科なんかで山根先生が言われるような、凝集性とか、集団そのものの効果を、ヤーロムの要因を忘れてはいけない。

それは二人でやることですね。リーダーとサブというような役割を、モニターをかけておくと集団が暴走してしまうこともある。仲間を作っておくこと。OT同士とは限らない。集団をどう活用するかということ、ただ単にさあ始めますよということだけでなく、目的を明確にする。今日はあなたこの役割やってねとか。市民ボランティアの人でも育てば、かなり上手に集団を運用され、かなり助かる。

Q. 精神分野での経験は、訪問分野ではどのように活かされましたか？

それはやっぱり注意することが増えていく。相手の心理状態を感じる訓練は自然と身につけている。相手が言葉にできない不満感や気を悪くされている時、精神科でやっていた対応が役に立つ。じっくり話を聞いたり、認めたり、関心を示したり、自分に余裕がないとそういう見方をしていなかった落ち度に気づくことがある。悩みは減ることはないですね、増える一方ですね。悩んでいることは、しっかりと胸に刻んでおくことが大事でしょうね。それはどの領域も一緒ですよ、人相手にしますから。

Q. 先生が考えるいいOTとはどんな人ですか？

一緒に悩んでくれる人やろうね。いい答えと、いい解決方法が言えればいいけど、目の前のことって難問が多いや。OTのところまで来ると難問になっていることが多い。だからこそ「つらそうやなあ...どおしよ...」と取り上げてくれる人やろな。(障害が)戻られへんと言われても、何かないかと悩んでくれる職種やろな。

◎最後に一言お願いします

私ができることはあなたも絶対にできます。なぜなら私ができただけです。何事も「こうすればできそう」と発想しましょう。先輩の経験に勝るものは後輩の発想と行動のみです。石山。

最後になりましたが、石山先生にはインタビューを快諾してくださり、貴重なお時間を頂き、大変感謝しております。石山先生の書籍やホームページ、コラムには日々の臨床や立ち止まり、悩んだときのヒントが満載です。皆様もぜひご覧になってはいかがでしょうか？

・千里津雲台訪問看護ステーション HP <http://www002.upp.so-net.ne.jp/ten/index.htm>

・書籍「観察力と考察力をみがく“ひょっとと視点”で広がる介護技術」中央法規

富山県作業療法士会 地域リハビリテーション部 担当：砺波地区